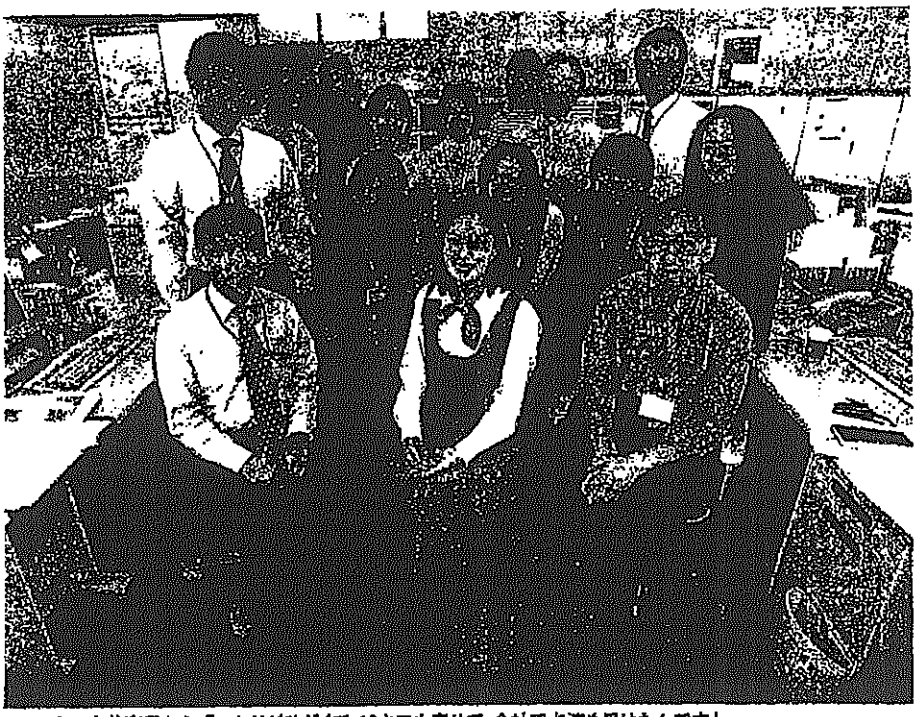
画にまでかかわり、売り場にも率先して立つ。残業は当たり前。カシミヤの製品を作っているモンゴルの工場に、出張もした。

それが妊娠してから、体調を崩し、仕事のペースを落とさなければならなくなった。自分が作り上げた売り場を、ほかの人に引き継がなければならない。木村さんは、

「損したかな」

と思う時期もあった。

でも周りの人からみれば、話しかけやすくなった。老舗百貨店の本店なので、毎週買い物に来る、顔なじみの顧客が数多くいる。そんな人たちが、木村さんの妊娠を知ると、自分のことのように喜んでくれた。うれしそうに孫の話を始める人も多い。



NECの三木英恵子さん。「つわりがひどくて、10キロも痩せて、会社で点滴も受けたんです」。その時上司が、妻から聞いた「つわりでも飲めるスープ」を教えてくれた

なごんじゃいます

木村さんは、いままで子供の話は苦手だった。よくわからないから、うまく話を合わせられなかったのだ。でも顧客の孫の話に、心から興味を持って聞けるようになった。ぐっと近い関係になれた。あまり話をしなかった他の売り場の店員からも、

「どう、調子は。大事にしてね」

などと声をかけられるようになった。少し悩んだ木村さんも、

「いまは、うれしいことが多くなった。これからは子供服売り場のことも考えられるし」

と柔らかい表情で笑った。

制服もいままでのカチッとしたものから、ふんわりとした服になった。それが周りから見ていて、ほほ笑ましい感じだ。後輩の相良有紀さん(32)は、

「木村さんがいると、ほわっとした雰囲気になる。なごんじゃいますよね」

と言う。自分も将来、仕事を続けていけそうだなと思えてくる。

出産を機に辞める人をなくしていこうと、企業内保育所を作る動きも出てきている。

「妊婦」という能力

日本郵船は4月、本社ビル内に保育所をオープンした。10年も育てた人材が、出産で退職するのは大きな痛手だ。まず働き続けやすい環境づくりが大事だと考えた。窓から皇居の緑が見えるように、一番良い部屋を提供した。朝7時から夜8時まで預けられる。良質なおもちゃもそろえ、5千万円の費用をかけた。働きやすい会社だという姿勢を内外に示す意味は、金額以上に大きいという。

資生堂人事部の図戸由美子さん

イー・ウーマン佐々木かをり社長が語る
生活とか満足感とか大事にする社会だから

私が最初の子供を産んだ7年前は、臨月まで仕事をしていたことが、とても珍しがられました。仕事先の人に、

「妊婦って辛苦しいと思ってたけど、そうでもないんですね」

とまで言われたこともある。マタニティスーツが、日本では見つからなかった。2人目はもうすぐ3歳。この5年間で、社会がとても変化したと思います。いまでは「頑張って働いている女性は、子供を産まない」なんていう考え方はなくなってきていますよね。

「えっ、社長をやっているのに、2人も産むの?」

と言う人は、まだいます。でも、自然なことと考える人のほうが、圧倒的に多くなりました。

一つは、人数が増えてきたから。いままでは特殊に思えたことが、事例が増えてきて理解が深まったのでしょう。妊娠して働いていても、大丈夫なのね、と思えるようになってきた。

もう一つは、社会の価値観が変わってきたからではないでしょうか。「生活」とか「満足感」というものを大事にする社会になってきた。戦後50年以上、効率が良くて、生産性が高い、ということばかり追求してきた。いろんなものを犠牲にして、すごい頑張らないとダメっていう社会だった。でも、そのゆがみが出てきています。

雪印などの食品のラベル張り替え事件は、企業と生活者が分断されていることから起きたミスの象徴でしょう。働いている人が、家庭や子供のことを考えられる人だったら、あんなことはできなかったはず。生活感というのは、いま企業にとって、大事な物になってきています。

妊婦の姿は、周囲に様々なことを考えさせます。安心して働けると思えるかどうかは、モチベーションにも影響しますよ。

女性向けサイト「イー・ウーマン」を2000年に設立、社長。著書に『妊婦だって働くよ』など

は、大きな変化の時期だと話す。いままでは、24時間バリバリ働けて、転勤も大丈夫ですというような人が、会社としてありがたい存在だという雰囲気があった。だが商品を買うのは、普通の人。

「いろんな人が会社にいないと、多様な考え方がつかめない。お客様の立場に立てなくなる」

子育てに忙しくてスキンケアに時間が取れない。そんな人に実感が持てないと、商品開発も販売も、心に響かないということだ。

企業が、「妊婦」というのも、ひとつの能力だと、とらえ始めてきている。

仕事を続けていけるかどうか。頭の中で考えているうちは、大変なことばかり、想像が膨らんでしまう。NECの三木美恵子さん(32)は、働き続ける決心がなかなかつかなかった。上司の野村昌敏(のむらまさとし)さん(42)に妊娠を報告した時、

「やめないんだよね」

と言われた。軽く出た一言だけど、うれしかった。でも、返事は保留してもらった。

社員の気持ちお客様に

その後、周りの雰囲気が全然変わらなかった。特別扱いされなかったことが、うれしかった。野村さんも、

「女性も多いし、戦力として重要な役割を果たしている。育休取って、戻って働くということが自然でないと、会社としてやっていけないですよ」

と当然のように話した。

体調が悪そうな時に、気を使うということはある。でもそれは様々な立場の人がいて、相手の身になって考えるということだ。

「職場という身近な場所で、いろんな立場の人と接することは、みんなにプラスになりますよ」

と野村さんは考えている。

商品開発に「ユニバーサルデザイン」という発想がある。高齢者、障害者だけでなく、けがをしている人、注意力が散漫になっている場合でも、使いやすい製品を作るということだ。すべての人に優しいデザイン、対応力を目指していくものだ。職場で、妊婦や体調が悪い人の身になれるということが、社員同士だけでなく、お客様に必ずつながっていくという。

会社にも、母子手帳は持ってくる。疲れた時、そっと開いて見る

そんな温かい雰囲気の中で、三木さんは働き続けることを決めた。悩んでいた半年前の自分に、

「そんなに深刻に考えないで」

と言いたくなる。難しく考えすぎていた。ぎりぎりまで頑張ると、まわりもギスギスしてくる。

「無理しないで」

と周囲の人が声をかけてくれる。そういう言葉があると、肩の力を抜いて、自然な感じで、

「もっとやろうって、思えるようになりました。できることを、100%やればいいんだ」

と考えられるようになった。

いまは、休みを取ることも、復帰して働くことも、「楽しみ」と思っている。